



市民かいぎ宣言(抜粋)

私たちは、全国各地において、それぞれのグループで、コウノトリが生息できるよう湿地づくりに取り組んでいます。私たち参加者全員は、次のことに取り組みます。

(宣言)

1. コウノトリが舞い降りる、生きものあふれる湿地をつくります。
2. 人も自然も元気になる湿地を育てていきます。
3. 市民、研究者、行政、企業などさまざまな力を合わせて、地域の湿地づくりに取り組みます。
4. 仲間と力を合わせ、コウノトリの生息地を広げるネットワークをつくり、世界へ広げていきます。

市民かいぎ

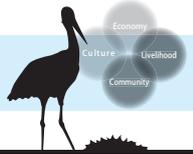
豊岡を出たコウノトリが舞い降りた先では、住民の手によってコウノトリを迎え入れるための湿地づくりや環境創造型農業などが始められています。

市民同士の情報交換・交流の場として初めて開催された「コウノトリの生息地を全国に広げる市民かいぎ」では、それぞれの活動の現状と課題を出し合い、共に考えました。

「豊岡市、兵庫県からは連携の発信は一切ありません。野生復帰事業を掲げて放鳥しているからには、豊岡以外に飛来した地域に対してもっと目を向け、市民グループ、行政に対しても積極的に連携の場をつくるべきだと思えます」。そんな意見も寄せられました。私たちに、先駆者としての態度が求められていると言えます。

かいぎの成果として、宣言がまとめられました。

【参加】鴻巣市こうのとりを育む会、国富の明日を創る会(小浜市)、水辺と生き物を守る農家と市民の会(越前市)、倉敷コウノトリの会、宇和コウノトリ保存会(西予市)など



市民・行政のネットワーク



自治体会議宣言(抜粋)

コウノトリにとっても人間にとっても「気持ちのいいまち」を全国に広げ、日本全体を「気持ちのいい国」にするため、地方から手をつなぐ。関係自治体会議という名のもとで。

(宣言)

私たちは、第4回コウノトリ未来・国際かいぎに合わせて開催された関係自治体会議において、次の連携を確認した。

1. 互いの知恵と技術を共有する場を設けます。
2. 政策連携を進めます。
3. 市民との協働を深めます。

関係自治体会議

コウノトリの生息地を全国に広げるには、市民かいぎ同様、自治体同士の連携も欠かせません。もちろん、市民と行政の協働も。

コウノトリでつながった9つの自治体が今後の取組みについて考えるべく、「関係自治体会議」を開催しました。会議では、特徴的な取組事例の報告のあと、座談形式で意見交換を行いました。

「冬場の環境用水をどう確保するか。国へも働きかけが必要だ」、「行政から依頼するばかりでなく、地域の人々を主役に、側面からサポートしていく姿勢が大切」

など、具体的な意見が多数交わされ、今後の情報共有、政策連携を視野に、自治体会議宣言がまとめられました。

「積極的に連携の場を」という声に応え、市民・行政のネットワークが、いよいよスタートです。

【参加】宮城県大崎市、埼玉県鴻巣市、千葉県野田市、新潟県佐渡市、福井県小浜市、福井県越前市、岡山県倉敷市、愛媛県西予市、豊岡市

農業

環境創造型農業分科会 「第1回生物の多様性を育む農業 国際会議(ICEBA2010)」



兵庫農漁村社会研究所
代表
保田 茂

有機農業は、もっぱら「食の安全」が強調されてきたが、もともと「環境保全」の理念もあった。ようやく「生物多様性」が認識される時代になり、豊岡でその第1回目の日韓中会議が開かれたことは画期的なこと。日本より10年遅く有機農

業に取り組んだ韓国は、生協組織を通じて有機の輪が都市部に広がり、生産者の取組みも広がって、今や日本をしのいでいる。市場経済化の道をまっしぐらに進む中国でも、有機農業に対する共感の輪が少しずつ広がっている。では高齢化が進む日本では？ 環境創造型農業、コウノトリ育む農法を拡大させるには、若い世代への「米飯食を含む」食の教育」が欠かせない。

コウノトリ

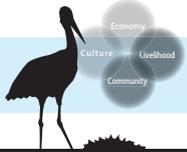
コウノトリ分科会 「これからのコウノトリの保全戦略 ～国際的な連携に向けて～」



県立コウノトリの郷公園
研究部長心得
大迫義人

越冬地であるはずの中国で、繁殖が行われるようになってきている。また、韓国最後の生息地である礼山郡では、コウノトリ復活の動きがあり、平成25年の放鳥開始を目指している。コウノトリの繁殖戦略は、局所個体群で独自の遺伝型

を固定しながら、他の個体群とゆるやかに交流することで遺伝的多様性を保持する「メタ個体群」であると考えられる。コウノトリを保全するには、局所個体群をきちんと守ることが重要。また、繁殖個体群の再確立と、越冬個体群の保全、その間を結ぶフライウェイサイト(中継地)の保全が必要である。今後、国際的な①情報と研究者の交換、②飼育技術者と研究者の交流が欠かせない。



分科会報告



未来

子ども・未来分科会 「世界一田めになる学校 in 東京大学」



NPO法人たんぼ
理事長
岩瀬成紀

子どもたちは、田んぼに入ると不思議に「懐かしい」と言う。彼らの心には、私たちの祖先たちの思いが宿っている。土と共に生き、未来を語ることにいかに重要か。そのことを、子どもたちの声から強く感じ取る必要がある。

コウノトリKIDSクラブのメンバーによる発表



たんぼの生きものになって考えよう
次は人間に戻って、何ができるか考えよう

環境経済

環境経済分科会 「生きものの多様性の保全と事業活動 ～生物多様性セミナー～」



東京都市大学・中部大学
教授
涌井史郎

自然の価値を可視化することが世界の潮流。非経済財であった自然を、経済活動に内部化する。自然を資本財と考える。豊岡は、コウノトリを通じて、そのことを具体的なケーススタディとして提起したと言える。

世界のGNPが年間18兆ドルであるのに対し、生物多様性サービスがもたらす価値は30兆ドルと言われる。産業革命から環境革命への転換が必要だ。古代ギリシャ人は、左手にエコノミー、右手にエコロジーの両方で一つだと考えてきた。われわれはどうか？ エコロジーとエコノミーをもう一度つなぎ直して融合を図る。これが豊岡から発信された大きなメッセージである。